

ひよっとして甲状腺？

しませ医院(保田) 島瀬 公一



喉が出てきた、痰がつまる、喉が圧迫される、体重が減った、目が出てきた、手が震える、汗がすぐ出るなど、いろいろな症状で患者さんは甲状腺外来を受診されます。甲状腺疾患なら必ず甲状腺全

割弱、これはバセドウ病と治療が全く異なるので注意が必要です。もう一つ稀な疾患ですが、亜急性甲状腺炎といって39度を越す発熱と甲状腺の一部に固い腫瘍を形成し、その部位に強烈な痛みを伴う疾患があり、バセドウ病とも無痛性甲状腺炎とも治療法が異なるので要注意です。

症状はいずれも動悸、息切れ、倦怠感、発汗、体重減少、手指の震え、下肢の脱力、イライラ、不眠症、食欲の二つ進、下痢など多彩です。

① 甲状腺中毒症
一番有名なのはバセドウ病です。以前は甲状腺ホルモンが高値の場合99%がバセドウ病として治療されていきました。最近、無痛性甲状腺炎といって、もともと慢性甲状腺炎(橋本病)で甲状腺機能低下症をきたす疾患なのに慢性炎症の急性増悪が起こった場合、一過性のホルモン高値となり中毒症を発症することが意外と多く(印象としてホルモン高値の患者の1

② 甲状腺機能低下症

慢性甲状腺炎(橋本病)が低下症の大部分を占めています。バセドウ病と同様に甲状腺は大小さまざまに腫れますが、バセドウ病の腫大は比較的やわらかく表面が平滑なのに対し、慢性甲状腺炎の腫大は固さがあり、表面がゴツゴツしています。女性に多く、喉の圧迫感、痰のつまり、まぶたの腫れ、手足の冷え、息切れ、脱毛、意欲

の低下、更年期障害に似た症状などさまざまです。

①・②とも治療は確立されており、適切な薬の内服で症状は劇的に改善し、全く普通の生活ができるようになります。バセドウ病は薬で完治しない場合は、手術や放射線治療をした方がよいケースもわずかですがあります。

③ 甲状腺腫瘍

見たり触ったりしただけで明らかに腫瘍がわかる例もあり、このようなケースでは触診の手の感覚で良悪性の判断がほぼつきます。エコーで診ると、さらに良悪性の鑑別は明瞭となり、細胞を採取(細胞診)して病理学的に診断を確定します。ただ最近はこのような例よりも、エコーの性能が上がったために見つかる腫瘍が増えていきます。5ミリ前後の腫瘍を含めると5人エコーすると2人〜1.5人に見つかるほどです。ほとんど良性の放置しておいても大丈夫な腫瘍です。ただ10ミリを越える腫瘍に甲状腺がんの約9割を占める乳頭がんの特徴を持つものがあり、細胞診をしておいた方がいい例もあります。良性でも3センチを越えると腫瘍が目立ち、喉の圧迫感を感じる場合は手術を勧めます。稀に、肺に転移しやすい濾胞がんのこともありますので。乳頭がん

と濾胞がんを分化がんといい、手術で治りやすく予後良好です。ごく稀に未分化がんがありますが、いまだ確立された治療法はなく、何をしても6カ月前後で命を奪われてしまいます。

以上が主な甲状腺疾患ですが、生活習慣病で潜在患者を含めると2千万人と言われている糖尿病よりも多いと言われています。症状が多様なため、不整脈や原因のよくわからない心不全として循環器科に、やせてきたためがんではないかと消化器科に、月経不順などで婦人科に、喉の違和感で耳鼻咽喉科に、手の震えで神経内科に、落ち着きのなさや、抑うつで精神科などなど。実は甲状腺疾患なのに？ひよっとして甲状腺？と頭の片隅で思ってみるのも病気が見つかる近道かもしれません。